

平成 22 年 5 月 27 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19730444

研究課題名（和文） 聴くスキルと社会的適応の関連

研究課題名（英文） The relations between listening skills and social adjustment-

研究代表者

久木山 健一 (KUKIYAMA KENICHI)

九州産業大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：10387590

研究成果の概要（和文）：日本では人の話を聴く技術が友人関係の適応に重要であると考えられるが、これまでは臨床・英語教育場面での検討が中心で、学級での友人関係などの社会的適応との関連はあまり多くなかった。そこで聴く技術の内容を明らかにし友人関係適応との関連を検討した。その結果、8つの聴くスキルがみいだされ（雰囲気作り、共感、アドバイス、表情読解、関心、目を見る、相槌、自然体）、友人関係満足や仲間への積極性などの社会的適応との関連がみられた。

研究成果の概要（英文）：In Japan, it is thought that listening skills play an important role in social adjustment. But most of the studies regarding listening skills have been conducted in counseling or English education settings, and they have been scarcely examined in the context of social adjustment. Analysis revealed that Listening Skills Scale had eight sub-scales (creating a comfortable atmosphere, empathy, advice, understanding facial expression, interests, eye contact, attending, and genuineness). Subscales had relation to friendship satisfaction and positive attitude toward peers.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	360,000	2,460,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：(1) 聴くスキル (2) 社会的スキル (3) 社会的適応 (4) 大学生  
(5) 青年期 (6) 友人関係

## 1. 研究開始当初の背景

これまで、適切な対人関係や友人関係と深い関連を持ち、包括的な社会的適応と関連す

るものとして、社会的スキルがしばしば注目されてきた。対人関係研究に果たす社会的スキル研究の役割は大きく、相川(2000)では、社会的スキルの不足とさまざまな社会的

適応との関連が指摘されている。例えば社会的スキルの低い者は、シャイネスが高い、孤独感が高いことが指摘されており、社会的スキルの低さとうつ病、ストレスなどとの関連も示唆されている。そのため、臨床心理学の分野においても社会的スキルに対する関心は非常に高く、多くの研究が行われてきた。

久木山(2006a)では、社会的スキル研究の問題点として、これまでの社会的スキル研究は、(1)すでに有している社会的スキルの高低と現在の社会的適応との関連を検討する社会心理学的研究、(2)社会的スキルに乏しい者に対して社会的スキル・トレーニングを行い、社会的スキルの獲得への介入を目指す行動心理学的研究に主な関心が集中していることを指摘した。そして、青年の自発的かつ自身の力による青年期の自発的な社会的スキル獲得過程について検討し、青年が自己の社会的スキルの問題を認知的かつ詳細に理解することが可能な社会的情報処理理論の観点から、社会的スキルの自発的な獲得の援助法について検討した。

しかし、上記の検討は、相川(2000)による社会的スキルの3要素である“話す、聴く、葛藤に対処する”のうち、話すに対応するアサーションに限定されているという欠点が存在する。現在、主にスクリーニング目的で多く使用されている社会的スキル尺度として、菊池(1988)による社会的スキル尺度(KISS-18)が存在する。そこで測定されている社会的スキルの要素は、“話す”および“葛藤に対処する”に属するもののみであり、“聴く”に対応する要素については測定されていない。そのため、これまでの社会的スキル研究の側面では、聴くことは非主張的であり、「主張ができないために相手の主張に従う」などのネガティブな位置づけになることが多かったといえよう。しかし、日常生活において他者から好かれ適応していると感じられる者は、上手な主張が出来ているだけではなく、他者の話にしっかり耳を傾けることで相手を安心させ、相手の気持ちを把握した上で主張したり、なかなか自分の意見を言葉にできない者の主張を促すなどの、聞き上手な側面を有していることが多いと考えられる。

聴く技術に関しては、カウンセリングにおいて最も重要とされる技法の1つとして挙げられ、さまざまな効果の検証やトレーニングの手法が開発されている。また、面接法をもちいた研究を行う際にも、聴く技術の習得が必要不可欠とされている(保坂・中澤・大野木, 2000)。しかし、それらは心理臨床の専門家として求められるスキルについての記述が主であり、一般の青年の聴くスキルにはどのようなものがあり、それらが学校内の友人関係の良好さ、自尊感情や友人満足度、仲間内での評判や地位などといった社会的

適応においてどのような効果を生み出すのかについての検討が望まれていた。

## 2. 研究の目的

以上の背景のもとに、本研究では一般の青年の聴くスキルの内容にはどのようなものがあるのか検討し、社会的適応との関連を検討することを第一の目的とした。また、聴くスキルが乏しい状態の原因について、社会的スキルとの関連が深い社会的情報処理理論をもとにして、聴くスキルの生起過程について認知的に検討し、聴くスキルの向上のための認知的働きかけの可能性について探ることを第2の目的とした。

最後に、大学在学期間での聴くスキルの発達過程を検討し、時期ごとで求められる聴くスキルの内容を明確にすることを通じて、聴くスキルのトレーニングに適切な時期や予防的な観点からの働きかけが必要な時期について考察することを第3の目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 青年の聴くスキルの内容

久木山(2006b)において聴くスキル尺度の作成の試みはなされていた。しかし、久木山(2006b)では、聴くスキルに該当する行動の採集にあたり、特定の大学のみで行った予備調査の結果をもとにするなどの問題点が存在する。そのため、さまざまな大学の全学年を対象とした調査を行い、聴くスキルに該当する行動をより包括的な視点で採集する。この際、大学内の対人関係の質およびそこで求められる聴くスキルの内容には大学の特徴ごとで異なると考えられる。そのため、予備調査の対象となる大学の規模、学部、学年、性、部活動、自宅生と下宿生の比率などに偏りが生じないように予備調査の対象を設定する必要がある。そのため、研究代表者の勤務する大学にとどまらず、広く他大学の学生に協力を求める必要がある。

質問紙法による調査以外に、聴くことが上手であると指名された者の特徴について面接法などをもちい採集したり、観察法をもちい聴くことが上手であるとの仲間指名を受けた者の特徴を採集したりすることなどを通じ、より内容的妥当性の高い聴くスキル行動の採集を目指す。

### (2) 聴くスキルと社会的適応の関連の検討

上記の手続きを経て構成された聴くスキル項目をもちいた質問紙を、さまざまな特徴のある複数の大学の在学学生を対象に実施し、さまざまな社会的適応との間の関連を検討する。

### (3) 聴くスキルの背景にある性格および認知的特定の検討

佐藤(1996)では、認知的側面に着目する社会的問題解決の社会的スキル・トレーニングは、今後欠かせないものであるが、現状ではあまり存在しないことが指摘されている。そのため、これまでの社会的スキル・トレーニングでは、認知的側面などの個人内過程への注目はあまりなされてこなかったことが問題点として挙げられ、今後検討することが重要であると指摘することができるだろう。これらのことより、認知面に注目した社会的スキル生起モデルに基づいた社会的スキル・トレーニングの検討を行うことが課題とされているといえる。

久木山(2006a)は、上記の問題意識のもと、Dodgeの社会的情報処理理論に基づきアサーション生起を導く認知過程の検討を行った。しかし、人の話を聴く側面に関する生起過程については検討出来ていない。そのため、久木山(2006a)で検討がなされた社会的情報処理尺度により、聴くスキル行動がどのような認知過程を経て生起するのかについて検討する。また、同時に聴くスキル行動の生起に有効に働く性格特性についても明らかにする。

### (4) 聴くスキルの生起過程に関する検討

Dodgeの社会的情報処理理論などをもとに人の話を聴くスキルについて検討する中で、聴くスキルに関しては、情報処理のプロセス自体に加えて情報処理のプロセスに影響する情動、動機づけ、パーソナリティ資源などの要因も重要な役割を果たすことが示唆された。そのため、まず聴くスキルを可能とさせる動機づけ要因およびパーソナリティ要因がどのようなものであるかについて検討する。

### (5) 聴くスキルの発達の検討

聴くスキルのトレーニングに関わる、長期的視点での聴くスキルの形成過程の理解が課題とされていた。その一環として、大学生時点での聴くスキルの高低が、家庭で体験したさまざまな形成要因とどのような関連をしめすのかについて検討する。

### (6) 社会的スキルの実行阻害に関する検討

トレーニングなどにより聴くスキルが習得されても、実行を阻害するような要因が存在するために、上手に人の話を聴くことが出来なくなることが確認されていた。そのため、

阻害要因について、阻害が起きる状況および阻害が起きやすい対象の2つの側面より採集し、どのような状況および対象の存在が聴くスキルの実行を阻害するかについて検討する。

## 4. 研究成果

### (1) 青年の聴くスキルの内容

青年の聴くスキルの内容にはどのようなものがあり、どのような構造を有するのかについて、幅広い対象に調査することで明らかにすることを旨とした。複数の大学の全学年を対象に、聴くスキルに該当する行動の特徴を尋ね、聴くスキルに該当する項目の整理を行った。その結果、青年の友人関係適応や学校適応などに有効に働く、聴くスキルの具体行動の構造について理解することが出来た。

次に、採集された具体的行動例をもとに作成した質問紙による調査を行い、因子分析などの分析を用いて聴くスキル尺度の作成を行った。その結果、雰囲気作り、共感、アドバイス、表情読解、関心、目を見る、相槌、自然体の8因子からなる聴くスキル尺度を作成した。

### (2) 聴くスキルと社会的適応の関連の検討

作成された聴くスキル尺度を使用して、対人適応との関連を検討した。その結果、聴くスキルは友人関係満足や仲間への積極性との関連がみられ、社会的適応との関連が存在することが明らかにされた。

### (3) 聴くスキルの背景にある性格および認知的特定の検討

聴くスキルの実行を可能とする性格特性や認知的特徴にはどのようなものがあるのかの検討を行った。みいだされた性格特性は、多くは主張するスキルに有効なものであったが、聴くスキルにのみ有効に働く性格特性も存在した。認知的特徴は、聴くスキルに特徴的なものがみいだされた。

### (4) 聴くスキルの生起過程に関する検討

聴くスキルを可能とさせる動機づけ要因およびパーソナリティ要因がどのようなものであるかについて検討した結果、感情コントロールなどの感情的要因が重要であることや、積極的かつ能動的な側面に関する性格特性、受容性に関する性格特性などが聴くスキルの高さに関連があることが示唆された。

### (5) 聴くスキルの発達の検討

聴くスキルの形成過程について、家庭、学校などでの経験や個人の志向性や動機づけとの関連を検討した。その結果、聴くスキルの家庭での形成要因は以下の3点に代表されることが示唆された。①家庭環境要因（「会話量」・「受容・温かさ」・「兄弟の世話」・「高圧的」・「他者尊重」）、②しつけ要因（「聴くスキル」・「全般」・「向社会」・「主張スキル」）、③モデル機能（「親の聴くスキル」・「親の反応のよさ」）。

また、聴くスキルの高い親や教師が存在するなどのモデリング機会の多さや、上手に聴くことによる仲間関係の良好化や親や教師からの肯定的な反応などによる強化などの形成過程などの存在が示唆された。

さらに、仲間との遊びと聴くスキルを含めた社会的スキルの形成との関連を検討し、仲間との遊びの中からチームワークやリーダーシップを学ぶことが聴くスキルの形成に重要であることを確認した。

#### (6) 社会的スキルの実行阻害に関する検討

トレーニングなどにより聴くスキルが習得されても、実行を阻害するような要因が存在するために、上手に人の話を聴くことが出来なくなることが確認されていた。そのため、本年度は、阻害要因について、阻害が起きる状況および阻害が起きやすい対象の2つの側面より検討を行った。

状況要因としては、①感情的要因（「イライラ」・「疲労・不調」・「落ち込み」・「眠気」・「緊張」）、②会話内容要因（「興味のなさ」・「自身の興味」・「知識のなさ」・「内容への反発」）、③リソース要因（「余裕のなさ」・「他の課題」）、④会話が行われる場所要因（「大勢の他者の存在」）が存在した。

対象要因に関しては、①話し方・内容要因（「自分のことばかり」・「自慢話」・「内向的」・「内容不足」・「やかましさ」・「怒りっぽさ」）、②相手への評価要因（「嫌悪」・「尊大」・「自己中心」）、③関係性要因（「親密性」・「年齢」・「自己の意見との相反」）の存在が確認された。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①久木山健一 交流分析による“苦手な人”理解の試み ―学級内での対人関係改善法開発に向けて― 九州産業大学国際文化学部紀要 査読無 44巻 2009年 169-180.

②久木山健一 仲間との遊びからの学びと社会的スキル、自尊感情、仮想的有能感の関連 九州産業大学国際文化学部紀要 査読無 40巻 2008年 127-135.

③久木山健一 大学生の社会的スキルと仲間からの認知度の関連 九州産業大学国際文化学部紀要 査読無 38巻 2007年 33-42.

〔学会発表〕（計 6 件）

①久木山健一 聴くスキルの家庭での形成要因 日本教育心理学会第51回総会 2009年9月22日 静岡大学（静岡）.

②久木山健一 聴くスキルの阻害要因に関する研究 日本心理学会第73回大会 2009年8月27日 立命館大学（京都）.

③久木山健一 仲間との遊びからの学びと社会的スキル、仮想的有能感の関連 日本カウンセリング学会第41回大会 2008年11月24日 筑波大学附属高等学校（東京）.

④久木山健一 聴くスキルの性格特性、認知的側面の検討 日本心理学会第72回大会 2008年9月20日 北海道大学（北海道）.

⑤久木山健一 Components of listening skills among Japanese college students and their relation to social adjustment. International Congress of Psychology 2008 2008年7月24日 ベルリン国際会議場（ドイツ）.

⑥久木山健一 社会的スキルの自己認知と他者にのぞむ度合いのズレと仮想的有能感、対人適応の関連 日本カウンセリング学会 2007年11月24日 琉球大学（沖縄）.

〔図書〕（計 1 件）

①小石寛文編著（執筆者数10名の3番目）『子どもの発達と心理』第3章 仲間関係の発達 分担執筆 八千代出版 2007年 49-67.

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

久木山 健一 (KUKIYAMA KENICHI)

研究者番号：10387590